

『井月の句集』をめぐって（承前）

——下島・芥川・瀧井・室生・島村らの関心——

要 旨

本稿（承前）は、昭和五十九年三月十五日発行『跡見学園女子大学紀要』第十七号に掲載した論考に継続するものである。『井月の句集』をめぐって——下島・芥川・瀧井・室生・島村らの関心——の内訳は左記の通りである。

- 一、島村利正と「火山峠」構想
 - 二、三種の井上井月句集
 - 三、室生犀星・瀧井孝作の関心
 - 四、芥川龍之介の井月作品化
 - 五、下島勲の『井月の句集』編纂
- すなわち、本稿（承前）では後半部、第「三」章の「瀧井孝作」以降の各項について考察する。

町 田 栄

なるほど、瀧井孝作が芥川龍之介に親炙し、濃密な芸術的交渉を持ったのは、わずかに大正八（一九一九）年四月より同十一（一九二二）年三月までの満三年間に過ぎない。田端の自宅の書齋に、菅虎雄（白雲と号す。一高時代のドイツ語教授で、師夏目漱石の友人。菅忠雄の父）揮毫の扁額「我鬼窟」を掲げ、毎日曜日を面会日と定めた、その当初からの常連訪問客である。普及版全十巻本『芥川龍之介全集』第七卷（昭一〇・三・五刊 岩波書店）所収の「月報第5号」に、「小惑」と題する我鬼窟訪問回顧を載せている。それに「書齋には、小説家の仕事の空気も濃厚で、ぼくらは語り合つてゐる中に先生の制作欲に感染してしまふのだつた」という。俳人瀧井折柴は、小説を「先生にかぶれて漸と書いてみる氣」を起こすのである。従つて、二人は瀧井が作句の、芥川が創作の手ほどきをする、相互に切磋の關係に結ばれる。

大正十一年四月には、瀧井は志賀直哉を慕つて千葉県我孫子町に移つてしまう。その後も、随伴して京都市四条河原町の橋本基（志賀に師事し、処女作「盜癖」大一一・一一「改造」がある。父の『橋本雅邦素描集』・志賀の『座右宝』などを編集）方に止宿したり、山科御陵前へ、上京区吉田中大路町へ、奈良市上高畑丹坂下の橋本の留守宅へ、北天満町へと仮寓を重ねて行く。ついで、同じ奈良幸町の志賀邸から「歩いて十分もかからなかつた」（『隨筆集 志賀さんの生活など』、昭四九・五・三〇刊 新潮社）という上高畑丹坂上に転居した翌年、昭和二年の夏に芥川の訃報に接す



る。ちなみに、終焉の地八王子市子安町に移るのは昭和五（一九三〇）年二月である。後年、「京都に二年半、奈良に四年半、これは、ぼくの留学時代だと思つてゐる」（『文学的自叙伝』、昭一一・五『新潮』）と意義づける。「田端」を離れてからも、上京のたびに芥川を訪れたらしく、また、彼我の間に手紙の交換は絶やさな。昭和二年一月九日に武者小路実篤編集の『大調和』発行準備の会議に上京出席するが、十四日の午後、犬養健とともに芥川家を訪問（下島勲著『人犬墨』所収「古い日記から」による）している。瀧井の芥川に会つた最後である。歿後、七月二十七日に弔問し、谷中斎場の葬儀、日暮里火葬場、翌朝のお骨あげにまで会葬する。以来、折りにふれて芥川を回顧し、交友、遺墨、作品、墓参などを語つて倦まない。歿後五十年にも、昭和五十一年八月一日付『文芸春秋』（第五十四卷第八号）に「芥川さんの置土産」を、近刊の全十二巻本『芥川龍之介全集』第九卷（昭五三・四・二四刊 岩波）所収「月報9」にも「芥川さんの作品など」を寄せている。


前記の『文芸春秋』芥川追悼号に書いた「田端」に続いて、昭和二年十一月一日付『大調和』（第一卷八号）誌上に「芥川さんの手紙」を發表している。芥川の瀧井宛書簡と、それに簡単な解説をつけたものである。故人の情誼を徳として偲んだものである。『大調和』は同年九月号に井上哲次郎「芥川龍之介の自殺について」、小林秀雄「芥川龍之介の美神と宿命」を掲載している。瀧井のこれは、雑誌創刊の準備会出席を利した芥川訪問が、最後の面談になつてしまつたという、哀切な私情が働いていよう。——ま、え、が、き、が、あ、つ、て、次、の、よ、う、に、い、う。


故人の手紙は大正八年から今年迄のもの書翰端書あはせて三十一通ある。凡そ発表しても差支ないやうなものばかりである。自分の註やら感想やらを附して茲に出して見る。

誌上に全「三十一通」の芥川書簡を、「大正八年八月二十五日消印端書」から「昭和二年二月二十七日消印端書（ペンがき）」にいたるまで順序に挙げる。これらはすべて『芥川龍之介全集』第十・十一卷（昭五三・五・二二、同六・二二刊 岩波）の書簡集に収載されている。当然のことながら、瀧井の各書簡に付記した「註やら感想やら」は収録されない。来信中の「同年（注、大正十年）、十月一日附書翰」（『全集』では書簡番号「九五二七」は、『井月の句集』編集にかかわるレイアウトの指示である。

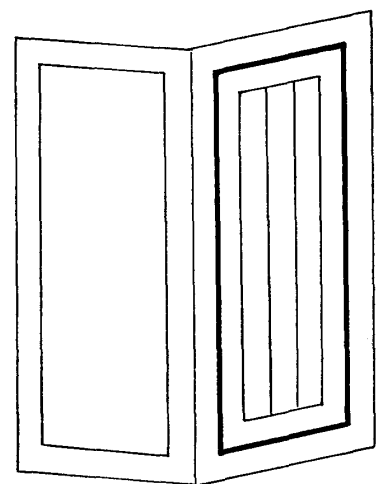
啓／今日湯河原へ参候 井月の句集の事よろしく願上候 誤字脱字を拾ふ事は下島先生にも出来得べく候へども印刷上の習慣その他は全然君の受持ちに願ひたく候 なほ念の為申上候へども

一附記は子持野の枠（）をとり中にも野を入れて印刷（）せられたし

二跋は唯の線の枠を入れ（）中にも野はいれざつと題句の頁を散文にしたやうに印刷せられたし

三附記の裏は裏白となるべければその場合はやはり  の枠だけ入れ中の野なしに印刷されたし従つて跋は別丁より起るものと思はれたし

四萬一附記の前の頁即附録の最終の頁、白紙なる時は附記を前記の体裁通り其處へくむ事にせられたし つまりその場合は



となるなり

跋

附記

その他は臨機の處置をおとり下され度候 下島先生は時々白紙の其へ埋め草の畫、或は詩歌など用ひんと云はれ候へどもさう云ふものは一切無用に願ひ候／校正は再校にて大抵了るべきか 校了 要再校等の手続きも下島先生は不案内につき御面倒ながら君に願ひたし／以上当用のみ／十月一日 了中庵主／折柴先生

註、田端の下島勲氏が井月^マ句集を自費出版の時、編輯その他を手伝つたのであつた。

湯河原温泉中西旅館から送った手紙である。到着即日の執筆であるところからも、『井月の句集』刊行を前にして、芥川のなみなみならぬ肩入れがうかがわれよう。芥川好み、美意識の行き渡ったレイアウトである。それは事こまかな、行きとどいたとも、また煩瑣な、神経質な指示とも言える。

後事を託された瀧井の「編輯その他」の仕事は、おそらく原稿整理の段階から始まっているに違いない。開業医下島には原稿用紙の使い方からして、一切「不案内」な世界である。割りつけ・校正・交渉など「印刷

上の習慣その他」実務全般にわたり、委任されて代行、処理していることがわかる。再度、「同年十月八日附湯河原温泉絵端書」(『全集』の「九五四」)でも、「井月の句集校正が出たらよろしく御面倒を見てくれ給へ」と言っている。静養先にあっても、その進行状態をはかって、時宜にかなった督励を行なう。瀧井ばかりでなく香取も、北原も、小沢も、この句集の協力者たちは、一種の「井月熱」に動かされて、力を尽くしたのである。

これより先、芥川は大阪毎日新聞社の海外視察員として四ヶ月間、中国各地を旅行(三月二十八日に門司を出港し、七月末に帰国)している。中国趣味を満喫したこの旅行は、また、心身の衰弱をもたらす。三月九日に上野精養軒で送別会、十九日に東京を発ち、門司直行の予定が前日から風邪をこじらせて、大阪下車を余儀なくし、一週間療養している。上海に着いても、乾性肋膜炎を起こして三週間ほど入院。南京でも発病、治療を受ける。帰国後も不調は続き、南部修太郎を誘って湯河原温泉に来て、静養につとめる。しかし、回復はならず、神経衰弱と不眠症に悩むようになる。

中国滞在中に、下島・瀧井らは資料の整理や、原稿の執筆に明け暮れていたであろう。芥川の帰国後、『井月の句集』刊行に向けて、具体的に作業は進捗する。下島宛書簡「九三四」では本の料紙のこと、九月二日付書簡「九三五」では高浜虚子に題句の寄稿依頼のこと、それを得て「印刷にとりかかる」こと、「句集の仮名少々直し候」とあって、芥川も原稿に目を通していること、十三日付書簡「九三八」では

虚子へ題句督促、「それだけは後に組ませる事としまづ原稿を刷らせてしまふ事」など、逐時の進行が散見される。この間、痔疾に苦しむ窮状も訴えている。芥川の意をくんだ瀧井が万事を代行して働いているのであろう。

なお、書簡「九五二」にみるような詳細な指示があったが、『井月の句集』に照らしてみると、「別丁より起る」芥川の「跋」文、最巻末に「附記」という配列である。従って、「付録の最終の頁」と「附記」の頁の裏面は、それぞれ二頁分が「裏白」となっている。最後に謝意を述べたいという、下島の意向によるのであろう。その文面に、瀧井の名前は無い。「緒言」に、「多大の援助を興へられた諸氏を列記して、其徳を記念する」とあって伊那各村の人々、つまり「俳句並に材料蒐集上、多大の援助を興へられた特志の人」の名前を挙げている。その最後尾に「東京。瀧井孝作。」とある。

世に『井月の句集』が誕生した直後に、瀧井の懇切な紹介を兼ねた「井月」論が発表される。大正十年十二月二日付『読売新聞』(第一万六千五百五号)七面である。のちに、随筆集『海ほおづき』(昭三五・一・一〇刊 桜井書店)に「俳人井月と其の句集」と題して収録される。本文の末尾に「(大正十二年十二月二日、読売新聞)」という付記があるが、誤植であろう。当年月日の紙上には掲載されていない。この随筆集は「俳句に関するエッセイ」をまとめ、加えて「近頃書いた小篇」随筆と、「未発表の俳句」二百句(『後記』より)を収めたものである。

瀧井文は、紙面に「子規の先駆／俳人井月／と其句集／瀧井孝作」とい

う見出しになっている。いかにもわかりやすい。全文を示す。

井月と云ふ人物は、何處からか安政文久年間に信州伊那の地に來て、井月といふ雅号だけで終始し生家や生立ちの事は愚か本名すら残さず、家もなく財も持たないで伊那で余生を終つた、ひとりの俳人であつた。

その暮し振りは、伊那の少年であつた下島^{ママ}氏(句集編者)に、跡^{ママ}から其句集の事を思ひ立たせた。さういふ魅力があつた。

下島氏の實見記に依ると、——或日、井月が天龍川原の柳が茂つてゐる午後の日蔭に坐つて襪履の襟の辺から虱を摘んで前の石の上に並べ、悠然として並べては眺め、同じ事を果しなく繰返してゐた。また或秋の暮に下島氏に一泊した井月は翌日午後五時頃トボトボ門口を出掛け、而して五丁余隔てた狐窪の菅原へ坐り込んで何を考へてゐるのか日が暮れても動く容子がなく、それで塩握飯と酒を持運んで勤めるとそれをたべて寝てしまつたので、頭から空俵を被せてやつたが身動きもない。翌朝そこに空俵はあつたが井月は居なかつた。上伊那郡富縣村福地の村社に井月選の自筆の奉納額があり、彼がこれを揮毫する際には酒を飲んで一二句書きまた飲んで寝てしまひ、一向出来ず四五日目には村の世話役から苦情が出たが、彼はそれで急いで書かうともせず相変らず呑んでは書きして八日目の晩に出来上つた。美事な書で其村社に現存してゐる由。——等の色色の話があるが、要するに其土地で書と俳句で知られ、超脱した暮しをして居た。

其書は、村人も珍重して書かせたやうで、この句集にも十幾種の墨蹟を写真版にして掲げてあるが、この類の人によく見る飄逸の脱線や厭な街気の臭味のない、よく齊つた高雅なものである。

その俳句は、井月が一所不住の人であつたから、別に草稿はなく人に書き與へた短冊や色紙其他から漸く蒐集され、村裡に埋れてゐた物が今度始めて世上に現れたのであるが、

春寒し彼岸櫻の甲斐もなき

陽炎や目立つ野中に一つ岩

山はまだ鹿の子まだらや梅の花

跳ねた儘反の戻らぬ小鯨かな

水汲んで戻れば咲くや罌粟の花

夕虹に空もち直す秋の雨

表から来る鯖刺の使かな

室咲きの花におとらぬ納豆かな

馬差の志なり新生姜

蓬萊のうつる夜明の障子かな

等、透徹した美しい句を吐いてゐる。元禄の猿蓑集の句に並べて遜色のない優れた内容を持つてゐる。句集には千四十数句載つてゐるがどれも美しい。俳諧史的には正岡子規の革新前斯道の最も地に墮ちた時代に、斯様な作家があつて今回更らに発見された事は一つの特筆さるべき事であらう。

さうしてこの作者——悠々とした涙のこぼれるやうな生活相を示

した自然児——井月は、明治十八年師走某の日伊那村の路傍乾田の中に、身には襤褸を纏ひ泥にまみれて倒れてゐたが、村人の手で隣村の知辺の許へやられ、其處に腰も立たず口もきけぬ病軀を横へて翌くる十九年の二月十五日に七十近い齡で死んだ。

因に「井月の句集」は、編者下島勲氏が奉仕の意味の自費出版で、同好に頒けた物であるが、未だ残部があるでせうから、若し見たい人は「東京田端三四八楽天堂内空谷山房」あて問合せたい。

この平易で、簡にして要をえた文章が、一躍、私家版『井月の句集』を「田端人」の圏外に解放して、世に弘めたであらうことは想像に難くない。

實際、客観的な立場にあって賞翫し、論究する好事家、批評家の弁ではない。珍重もせぬ。内側の人、井月句を育てあげた人ならでは吐けぬ、優しい理解と愛情を注いでいる。——「下島氏の実見記」によると言つて、所収の「奇行逸話」中の三話を採つて紹介する。それは井月の奇癖、奇矯のふるまいとして語っていない。縹渺の間に遊ぶ仙人、奇人として描いてもいない。確かに実在した自然児、自由人たる風狂者の生のまゝ、素のままの面貌を伝えているのだ。この観点から選句して示す。代表的な秀句というならば、他の作を挙げるかも知れない。この観点から筆跡を「この類の人によく見る、飄逸の脱線や厭な銜気の臭味のない、よく齊つた高雅なもの」と評価する。句作を河東碧梧桐に師事し、中村不折の六朝書の研究会誌『龍眠』編集に従事して、双方に通じた瀧井の言は重い。文章の頭尾を井月の伊那去来でまとめ、悠悠自適の面影を映し

ている。放浪、孤独、乞食、横死に閉じた後半生に悲惨さを認めない。翌年春に、瀧井は「田端」を去り、ふたたび戻らぬ。『井月の句集』はもてはやされ、再版を求められ（前記「古い日記から」昭二・一・一〇付）、郷里では高津才次郎の実地踏査が進み、発掘の新資料が山積されていく。そして、ついに白帝書房版の『全集』刊行にいたる。

——瀧井はなつかしく望見しているようだ。以後、井月に宛てて書いたことはない。時に小沢碧童に、永井荷風に、芥川を論じた文章中に、触れて論及した断章を見るのみである。すなわち、それぞれ「芥川さんの俳句」（『文芸』臨時増刊『芥川龍之介読本』昭二九・一二・五刊 河出書房第一一巻第一五号）、「荷風管見」中の「家出をした人」（昭三四・一一・一発行『素直』第八集）、「芥川龍之介遺墨——小穴隆一の丹念な解説——」（昭三五・五・二三付『産経新聞』朝刊第六六七二号、三面）の三篇である。なお、書評は小穴隆一著『芥川龍之介遺墨』（昭三五・四・一刊 中央公論美術出版、八百部限定）にあてたもの。その中に、井月を「家出をした人」と論じた一文を見る。

荷風散人は、「家出をした人」の系譜と考へられました。／＼この「家出をした人」は、今も昔も多い方で、その先蹤の例を一口にいへば、聖書の放蕩息子、玉手箱の水江浦島子、寒山詩の寒山拾得、それから歌人西行、俳人芭蕉、文章、惟然、蕪村、一茶、井月など。おのおの「家出をした人」です。——井月といふのは、幕末頃の行脚俳人で、信州の伊那に何年も逗留して、「乞食井月」と云はれて、明治の初年に伊那の村里で行路病死して、後年になつて、伊那の人

は、井月の見事な墨跡を愛してまた超脱の行状も追憶されて、『井月の句集』も編まれましたが。——この俳人の方では、家出の先蹤も多いせいか、現今でも、所帯崩しの漂泊俳人は絶えないやうです
が……。

やはり、瀧井にとって『井月の句集』はかけがえのないもので、『俳人瀧井全集』の豪華本を想起しない。

四

芥川龍之介が、いつ乞食井月とその句、書に邂逅したか、時期を特定できない。必ずや、それは下島勲の語り伝え、愛蔵する井月句の披露によるものに相違ない。芥川も、周辺には、当初、井月を知る者は下島を措いて他にいないからである。双方、親昵を増す間におのずから話題のぼり、下島のおぼろげな回顧談、ふるさと話に耳を傾け、談熱を帯び、興趣のあがる場面は想像できよう。おそらく井月の不羈、無縫、放埒、悲愁の生に寄せて、関心・共鳴は深まるだろう。律義な芥川は、あまりに強く家族的な桎梏の感を抱いているのである。やがて、鑑賞に堪えるものとして、「我鬼窟」訪問者たちに喧伝するところになつて行つたのだろう。——

下島と芥川との交渉は、同じ田端内に数百メートル隔てて住む、医家と患者との関係に始まる。前述のように、下島の方が先住者である。その回想によれば、「医者としての私はその職務の上から彼が帝大卒業の年ごろから懇意」(「芥川龍之介君の日常」、『人大墨』所収)になつたという。

芥川の東京帝国大学文学部英文科卒業は大正五(一九一六)年七月で二十五歳、下島は四十七歳(ともに数え年)である。日記・書簡などに、芥川一家の信頼を篤くした主治医として往診、投薬、加療の記録が随所に見える。横須賀の機関学校教官になつて赴任し、田端を離れた期間中は断するが、辞任してふたたび帰ってから以降は、終生親交を保っている。いわゆる「田端人」の筆頭人、最古参である。

大正八年度の「我鬼窟日録」に、「空谷居士」ならびに「瀧井折柴」の名前が記載されている。下島が同郷の北原大輔を大正八、九年の「夏の夕方」に同伴して紹介し、『時事新報』文芸部記者の瀧井が初訪問した半年後に、同門の「大正八年十一月に、小穴隆一(一游亭)を田端に伴つて、それから小穴隆一が大正九年に、小沢碧童を芥川さんに引合せた」(前掲「芥川さんの俳句」)のである。「田端人」の輪は広げられ、瀧井を除いて、「澄江堂」時代に引き継がれて行く。室生犀星の紹介で、堀辰雄が訪れるようになるのは大正十二(一九二三)年十月の頃らしい。

——芥川文の中で、「井月」が記された最初は、大正九年「六月十六日」の日付を持つ下島宛書簡(七三〇)であろう。それには、下島の贈った「鯉」などの川魚への礼ことばに添えて、次の句が書かれてある。

鯉が来たそれ井月を呼びにやれ

もとより、軽口を弄した戯句にすぎまい。いや、戯句なればこそ、井月をめぐる二人だけに了解される、日ごろの手柄がほうふつする。井月が共通の話題になつて、すでに久しい。

三十余年前のこと、往昔といつてよいだろう。この句は下島の郷里出

奔以前、下島家内の一情景をさながらに写している。懐旧の情をそそられるであろう。乞食井月のぶらり訪れるたびに、厭わず酒食をふるまった下島の父親の口吻になぞらえて、よんだものである。母親に命じられて、井月を「呼び」に行くのは、少年の日の下島その人でなければならぬ。下島の思い出話にもとづく作句であることは明らかだ。父親の口吻を模したのは、句集作成の意図が、ひそかに下島の父親にデディケートすることにもあった胸中を、芥川が掬しているからであろう。不時の到来物に喜ぶ芥川は、転じて、下島の心懐に入っただけなのである。してみれば、「井月」はふるさと話の域をぬけ出して、句集編纂・刊行を目指した準備段階、井月句や書の蒐集が、在郷の弟、下島富士によって推進されている段階にある。

同年「(九月十日)」の執筆月日の付記された、「雑筆」中の「井月」が掲載されるのは、大正九年十一月一日発行『人間』(第二卷十一月号)誌上である。

信州伊那の俳人に井月と云ふ僧あり。拓落たる道情、良寛に劣らず、下島空谷氏が近来その句を蒐集してゐる。「朝顔に急がぬ膳や残り客」「ひそひそと何料理や楯明り」「初秋の心づかひや味噌醬油」「大事がる馬の尾、つや秋の風」「落栗の座をさだむるや窪たり」(初めて伊那に来て「鬼灯の色にゆるむや畑の繩」等、句も天保前後の人にしては、思ひの内好い。辞世は「何處やらで鶴の声する霞かな」と云ふ由。憾むらくはその傳を詳にせず。唯犬が嫌ひだつたさうだ。(九月十日))

初めて、「井月」の名と句の公開された文章であろう。伊那峡の風流人たちに愛せられ、埋れかけていた井月句が甦ったのである。しかし、芥川は単に『井月の句集』の刊行予告、宣伝の労をとったわけではない。布石にとどまらない。

刊行一年前にして、これだけの事を一挙に言いついては、事実を瞠目せざるをえないのだ。積極的に、井月句の存在を世に顕彰してはばからぬなるほど、このエッセイに書家井月について言及されていない。披見した蒐集資料に不足しているからであろう。取り挙げた句にしても、まだ選句の余地の少なさを感じさせる。が、代表作と目される「落栗の」「何處やらで」の二句を採っていること、「天保前後の人にしては、思ひの外好い」という史的評価、「拓落たる道情、良寛に劣らず」とする求道性の指摘など、後年行なわれる井月論の原型を提出している。基本路線の敷設されているのを見る。井月句・書の全容が明らかになって、「跋」文に継承され、詳述され、また瀧井・室生に踏襲される論点は押えられているのだ。この先見性に富み、正鵠をえた井月原論は、卓抜な鑑識力をそなえた芥川の、長い井月親炙、傾倒の累積がもたらしたものである。刮目に価しよう。

続けて、大正九年度の下島宛書簡中に、芥川の井月を述べたことばを拾って行く。十月十一日付(七八二)に「井月上人の句漱石先生の書などいろいろ御話を伺ひたいと存じます」がある。十月十七日付(七八六)には、「明日御出立御帰省の由旅中御恙無之きやう祈上候」とあり、これを受けついで、十月二十七日付(七九二)に「井月翁の材料も御

集まりの由御同慶の至に存じそろ」とある。下島が井月関係の資料蒐集のために、伊那に帰省し、かなりの収穫のあった旨、芥川に報告していることがわかる。十一月十六日付〔八〇二〕には、到来物の密柑を贈って、

井月のほ句（注、発句）写し倦む折々はこれ食^つませとわがたてまつる

とうたう。医業の余暇をさいて、井月句の筆写、原稿の整理に努める下島を慰めている。十一月二十四日付〔八一二〕は旅先より絵端書を送って、

京阪より名古屋へ出て木曾の紅葉を見て當地（注、下諏訪）へ来ました 二三日中に帰京する心算です

井月の瓢は何處へ暮の秋

晩秋、みずからの旅情を叙しながらも、心は下島のもとへ、井月資料の整理状況を思いやる。「二三日中に帰京する心算」が句に密着して作用している。「瓢は何處へ」は酒好きの井月の飄飄、恬淡たる風姿を描いたものだが、その意を寓したものと下島は解し、励まされたに違いない。

大正十（一九二一）年度に入って、一月二十三日付〔八四五〕に、「唯今人來り居り井月の話出で居り候につき例の扇面と尺牘一寸拝見願はれまじくや 御大切のものを粗末に扱ふやうにて氣にとがめ候へども折入って願上候」と。書中の「人」は誰れを指すか不明だが、『人間』誌上の短文に触発されて関心をそそられた、同好者とも見られる。「例の扇

面と尺牘」は昨秋の伊那行で発見し、借覽して来た新資料であろうか。芥川はすでに披見しているものだ。いずれも、『井月の句集』中に写真版で納められている。

前述のように、中国旅行より帰ると、句集刊行は具体化し、進捗して、あわただしさを増すようだ。九月二日付〔九三五〕、前掲に、「鮎の鮎」を贈られた礼状に、

井月ぢや酒もて参れ鮎の鮎

先きの「鯉が来たそれ井月呼びにやれ」と同工異曲のようであるが、氣息を異にする。いかにも直截である。折りよく訪れた井月を喜んで、到来物の「鮎の鮎」を肴に、何よりも好物の酒をふるまおう、という。初五「井月ぢや」と置いたのは、句集刊行予定日も決まり、それを目睫の間に行っている期待感、喜びを生き生きと伝えていよう。九月十三日付〔九三八〕、前掲は痔疾の痛みを訴えて、「下痢以來痔と云ふものを知り、恰も阿修羅百臂の刀刃一時に便門を裂くが如き目にあひ居り候」と書き送る。下島が見舞に贈った「いちじく」に対する、九月二十四日付〔九四四〕の礼状に、

井月も痔をし病めらば句にかへて食しけむものをこれの無花果

惨状を滑稽化し、洒落のめしてはいる。「痔をし病めらば句にかへて」は、さすがの井月も激痛をこらえきれず、句作どころではあるまい、とよむ。芥川は後事を瀧井に託して、湯河原温泉へ保養に行くのである。

右の句や歌は、すべて私信のうちに五・七・五なり、五・七・五・七・七なりの声調をととのえた、戯作の類である。事ごとしくも、俳句・

短歌をもって呼ぶことは控えなければならぬか。——千数百作にのぼる俳句・短歌の中から、精選に精選を重ねた絶唱のみ「七十四句」、「二十五首」を随筆集『梅・馬・鶯』（大正一五・一二・二五刊 新潮社）に「発句」・「短歌」の項を立てて載せている。いわば、芥川自選の句歌集であろう。とりわけて句作には、碧梧桐門下の「小沢碧童」・小穴「一游亭」・瀧井「折柴」・遠藤「古原艸」らの「鉗鎚」（「わが俳諧修業」）を受け、しかも、ついに新傾向に行かない。古式を固守して、精巧を凝らした苦吟家だったのである。かえって、碧童などは芥川の影響下に十七字の定型句に移ってしまう。芥川の「発句」は余技の境を出ている。——言うまでもないが、右の即興五作は一句、一首たりとも、「発句」・「短歌」中に採られていない。

ならばとて、駄作と断じ去るには惜しまれる。句会吟、歌会詠の皆無の芥川は、書簡中に、それを行っている概がある。暢達、軽妙、諧謔を即席に揮った作句、作歌にも芥川一面は蔵されている。少くとも、『井月の句集』刊行に向けて、下島と親身に同行したひとこま、ひとこまを鮮やかに記している。刊行過程の裏面史を実証する。句集編纂の途次に慰勞し、督勵して来た芥川の、下島に報いた情誼が映っている。

湯河原滞在の二日目に、『井月の句集』に宛てた「跋」は書かれる。その末尾に「大正十年十月二日 芥川龍之介筆記」とある。のちに、この「跋」文は随筆集『點心』（大正一一・五・二〇刊 金星堂）に初収録するが、標題は『井月句集』の跋となつてゐる。脱字であろうか。以降、『梅・馬・鶯』（前掲）収録においても、現在の『芥川龍之介全集』第五卷（一

九七七・一二・二三刊、その第二刷は一九八二・九・二〇刊 岩波）収録にいたるまで同様である。この『全集』は原本に当たっていない。「後記」中の『井月句集』の跋」解説に、次のようにことわっている。

大正十年（一九二一）十月二十五日発行、下島勲編の『井月の句集』に「跋」として掲げられたという（昭和二年九月二十日発行の『愛書趣味』第十二号）が未見である。（注、一刷・二刷ともに同文）

この『點心』は三六判、布装、アンカット本で知られるシリーズ『随筆感想叢書』全十三巻の一つで、誤植がはなはだしく、芥川の閉口（大一一・七・四付書簡「一〇五六」）している本である。表紙・背紙・扉に「芥川龍之助」とあるのは、その最たるもの。

「跋」はいささか晦渋である。肩肘を張った文章だ。芥川の、句集編纂にかかわる側面的援助や、下島との濃やかな交情の経緯を看過すると、一読、銜学趣味と空疎で、奇矯な言辞とに嫌味すら感じるほどである。しかし、凝りに凝った意匠は、芥川の贈った機知、諧謔、皮肉としなければなるまい。——跋文らしく、「井月の句と共に、井月を傳して謬らなかつた」編者下島の功勞をたたえる。むしろ、一年前に書いて井月論の出発点を画した「雑筆」中の「井月」を一部補い、加えてというより、主眼は、井月靚に新生面を開いているようだ。小説家の創造した井月像、それは多分に奇をてらった新解釈をくだしているといつてもよい。かつて、「草廬さへ結ばず、乞食をしてゐた」井月の、「慥むらくはその傳を詳にせず」というところに、素朴な親愛感を掬い取っていた芥川であつた。今、少し違ふ。

実際に、下島のもとで筆蹟を数多く披見した芥川は、まず、書家井月を評価する。

しかも亦彼の書技は、「幻住庵^{マム}の記」等に至ると、入神と称するをも妨げない。

井月の筆録した松尾芭蕉「幻住菴の記」は、句集巻頭に、全文の縮少写真版を折り込みに、また、その部分拡大写真も掲げてある。

——この「書技入神」の評について、石川淳『諸國畸人傳』中の「井月」に異見がある。

芥川龍之介は井月全集の跋（注、石川は『井月の句集』を参看していないらしい）の中に、幻住菴の記に於ける筆蹟をよること、書技入神と評してゐる。幻住菴の記の筆蹟は、わたしも圖版に依つてそのおもむきをうかがつたが、なるほど一筆一盞、こころをこめた跡はしのばれる。ただし、入神とまではいはぬが花か。トボトボのグヅグヅにしてはと、目をみはるところに花があるだらう。

と。書画骨董に眼識を持つ芥川が、一種奇警の言を吐いたものである。不当な、過褒の評を与えた、と駁するまでもなからう。井月を指して「最高峯の高さ」、「古俳諧の大道」、「巨鱗」などということばに類して、同列に「書技入神」も並んでいる。

今回の芥川は、井月に向つて、充分な客観視の用意をもって臨んでいるのだ。

井月の句集を開いて見ると、悪句も決して少なくはない。天明の遺音は既に絶え、明治の新調は未起らなかつた時代は、彼にも薰習

を及ぼしたのである。

「薰習」とは逆説である。井月一辺倒ではない。この冷静な、皮肉な批評家が、安易な誇張なぞするはずはない。その上で、あの術学的な比喻を使って、井月を照し出してみせる。

出典を確認できないが、「天竺の鹿頭梵志」は「髑髏」を観察し、掌で叩くだけで、生前その人の「死の因縁」を明らかにしたという。釈迦牟尼世尊が試みに、仏弟子優填王^{うてんおう}の髑髏を示して判じさせたところ、この「無奈涅槃」の境に入っていた比丘には「梵志の神識」も及ばず、応えられなかったという。芥川はこの故事を引いて、「井月の髑髏を撃たせて見ても、梵志はやはり喟然として、止むより外はなかつたであらう」と説く。同様に、井月も「無終無始、亦生死無く、亦八方上下適くべき所無し」という超俗、悠久の大器量だったから、と説いているようだ。もちろん、井月が仏教史上至尊の人などといっているのではない。

計りがたい広大無辺な、その生を謳つたものとは知れる。だから、このせち辛い近世にも、かう云ふ人物があつたと云ふ事は、我々下根の凡夫の心を勇猛ならしむる力がある。

と讚美する。しかし、嘆声に素直な流露感はない。——こうした無辺際の人として井月を措定するとき、憧憬や理想の対象化も空虚な言辞にとどまり、逆に、生きた実在さえ稀薄になりかねない。野人、自然児井月の面目は皆無に近い。芥川は該博な知識を駆使して井月を論じ、機知をもって井月を追尋してみた。そして、井月の実像、実態を失なう。みずからの知才の陥穽にはまつたのである。芥川自身、「勇猛ならしむる

力」を感得して、その種の創意を肥やしているだろうか。

芥川「跋」の機知、諧謔を弄して描いた井月像を横切ったものは、石川淳のそれが現われるまで永く出ない。辛辣きわまりない舌鋒で、井月を論じ立て、井月の実体も、實在性の有無をも紛らわせてしまった作品は、昭和三十一年十月二十八日発行『別冊文芸春秋』（第五十四号）に掲載した「井月——諸國崎人傳 六一——」である。言ってみれば、「跋」は石川の遠い先蹤をなしている。

はたして、短篇小説「庭」（大正一一・七・一「中央公論」第三十七年第七号に発表）における「井月」像では、一転して、見事なリアリティを回復する。「井月」は草莽に隠れていた「畸人」ではなく、それを見出し、何んと、列「傳」中に挙げるべき人でもない。この放浪の「乞食宗匠」は、我が身を有為転変に任せた故に、その圏外にまぬかれえた、稀有な自由人として實在性を發揮する。制作動機に働いているだろう。

「庭」は明治開化期ものの一編である。この作品以降、ようやく顕著に真向って取り組むようになる没落、廃亡をテーマとする作品群、その嚆矢として注目されよう。やがて、芥川は仮構を一枚、一枚と剥ぎながら自滅を告白して行く。——瀧井の「純潔——『藪の中』をめぐりて——」（昭二六・一・一「改造」第三十巻第一号に発表）に、「密度の濃い短篇『庭』も、小穴君が協力した材料でした」という。『井月の句集』刊行後、大正十年十二月三日小穴隆一宛書簡「九七六」には、「井月の短尺目つきかりしや否や井月は木曾へは少くも三度行つてゐるよし探せばきつと何處かにあるべし」と書き送っている。帰省先は、つねに「長野県中央線洗馬駅

志村様方」だ。小穴の郷里、山間の洗馬^{せま}駅の営業開始は明治四十二（一九〇九）年十二月一日である。作品の時間推移にほぼ見合う。「庭」は「中村と云ふ旧家」の最後の三代、四十年あまりの廃絶史を描く。すなわち、幕末、「和の宮様御下向」の中仙道筋、木曾の洗馬宿の本陣の、文久二（一八六二）年十一月に都人たち一行の宿を勤めて、「名を賜はつたと云ふ石燈籠」を配した広大な名園が荒廃し尽して、ついに「停車場」に変貌してしまうまでを物語る。

「長男」が家督を継いで、「御維新後十年ばかり」の間、この古い由緒ある庭園は「どうか旧態」を保っていた。しかし、当主は何物も「荒廃」させずにはおかない、圧倒的な「何か人間を不安にする、野蠻な力」が迫って来るのを感じた。数年後、「中村家」の隠居は「池の向うにある洗心亭へ、白い装束をした公卿が一人、何度も出たりはひつたり」する幻を見た直後に死ぬ。まだしも、先代は中村家の盛事を夢見ることが出来た。翌年、養子に行っている「次男」が養家の金をさらい、酌婦とともに駆け落ちしてしまう。さらに、数年経て「長男」が肺病で死ぬと、「三男」が家を継ぐ。「十年」ぶりに、悪疾をえた「次男」が帰ってくる。療養中のある春、「次男」は思い立って、荒れるにまかせた庭園の復旧を企てる。家の存続に放任的な「三男」は冷淡だったが、「長男」夫婦の遺児「廉一」がこれを手伝う。「年とつた廃人と童子」との独力の復旧作業は徒労にすぎない。少しく廃亡への傾斜にあらがい、「次男」の死を早めただけである。それから、「十年たたない」内に一挙に破壊される。今は跡地に「停車場」が建っている。「中村の本家」は死に絶え、

離散し、「廉一」のみ「東京赤坂の或洋畫研究所に、油畫の畫架」に向つてゐる。——「画業にいそしむ「廉一」の設定も、洋画家小穴の「協力」である。

新時代に遭遇した「中村家」三代の当主たちの中で、最も悲劇的なのは「長男」であろう。じりじりと詰め寄る、没落と廃亡の宿命を自覚している。「長男は表徳を文室と云ふ、癩癖の強い男だった。病身な妻や弟たちは勿論、隠居さへ彼には憚かつてゐた」と設定される。「旧家」の重荷を負い、その崩壊を予見する者の鬱屈、焦燥を示している。芥川思想を代弁する。この「長男」に交渉を持つのが井月である。

唯その頃この宿にゐた、乞食宗匠の井月ばかりは、度々彼の所へ遊びに来た。長男も不思議に井月にだけは、酒を飲ませたり、機嫌の好い顔を見せてゐた。「山はまだ花の香もあり時鳥、井月。ところどころに瀧のほのめく、(傍点部注、初出誌「ほめく」。収録作品集「春服」大一一・五・一八刊 春陽堂によって改める)、文室」——そんな附合も残つてゐる。

俳諧は当主の唯一の心やりであり、「文室」は雅号である。井月は侵食されるべき何物も持たない。清冽な慰めを見出したのであろう。「長男」は井月を愛し、酒食を勧め、書を好み、「機嫌の好い顔」を見せていたのである。

「蛙が啼いてゐるな。井月はどうしつら？」——これが最後の言葉だった。が、もう井月はとうの昔、この辺の風景にも飽きたのか、さつぱり乞食にも来なくなつてゐた。

当主の臨終に思いやる井月は、まぎれもなく野人であり、放浪者であり、雲煙にまかせた自然人である。芥川の希求が鮮やかにたたえられていよう。「跋」文に、井月を優陀延比丘になぞらえて、「無終無始、亦生死無く、亦八方上下適くべき所無し」と評した、その自然の随順性が具象化されている。関連して、下島の「乞食井月と夏」(昭一五・八・一「旅」第十七卷第八号に発表)に次のことばがある。井月の脱俗、超俗の意味するところを示唆しよう。

芥川龍之介は井月句集の跋で、彼を優陀延比丘の髑髏に譬へてをります。が、それがどの程度に合致してゐるかは別問題としまして、権力にも威圧にも金力にも暴力にも無抵抗で、また寒暑にも饑餓にも痛苦にも、唯黙々として天命を待つといふやうな柔順さは、一寸何といつてよいのかわかりません。

直接に、作中に登場する井月は右に引用した寸描にとどまる。「文室」が脇を付けた井月の発句「山はまだ」は、句集の「夏の部」から採つたものである。作品の主役たる「中村と云ふ旧家」、その命名は下島の「母の生家大久保の中村方」(「奇行逸話」より)、「中村大人(注、伊那村大久保の中村新六を指す。下島の従兄か)の子息誕生を祝ひて」の詞書(「夏の部」の句)などにかなう。仮構の主軸は、井月を介する下島・小穴と芥川との関連を裏づけよう。

永く下島に鼓吹された井月享受は、小穴を加えた制作「庭」において頂点に達する。——井月の生はいかにも彼岸的であったのだ。反照される此岸の生を、芥川は「次男」・「廉一」の生の方を選択し、営まなければ

ばならない。哀しくも、「勇猛ならしむる力」の發揮を覚悟したのである。それを「我々下根の凡夫の心」と自称する。その後半生、芥川は井月を語らぬ。あえて、別途を歩んでいるからである。

五

『井月の句集』をめぐる人々のなかで、下島勲はその少年時代に井月その人を実見した、唯ひとりである。前述したように、十三歳のときに郷里を出奔しているから、井月の実像に接したのは短期間であり、見聞の記憶も乏しい。しかし、何よりも同郷人である。伊那峡に近く、井月の足跡のあるという洗馬村（現、長野県塩尻市）に生まれた小穴も会っていない。

井月は私の幼少の時代に、私の家や親類などに入出入りしてゐた人物なので、まのあたり接見してゐたことは云ふまでもなく、彼のためには、吹雪の夜さむを酒買ひに遣らされた記憶さへ残つてをります。當時父などから、——井月は阿呆のやうに見えてその實案外の學者で、俳道はもとより書が中々に優れてゐると聞かされて、世の中には見かけによらぬ不思議な人間もあるものだ、感心させられたのであります。

と、「巻頭に」（白帝書房本『井月全集』所収）で述べている。素朴な実感のこもった回想である。培われた井月発掘、句集編纂の素地をうち明けていよう。——なるほど、前半部を読むと、芥川句が下島の提供した、少年の日の井月回顧談に依拠し、また、「父」の口吻を如実に模してい

ることもうなずかれる。

後半部、父親の活眼によって、下島少年は井月に対する見方を改めたのである。啓発とは当然のことながら、留意すべきであろう。もし、「父など」の教訓がなかったとすれば、下島少年も、乞食の醉漢を忌み嫌い、はやし立て、いたずらを仕かける村の悪童であつたに過ぎない。同様に、父祖の教えによって、井月の真骨頂を見あやまらなかつた唐木順三（明三七・二・一三〇—昭五五・五・二七 1904—1980）がいる。伊那毎日『井月全集』に「序」文を寄せた唐木は、下島より三十年も後の生まれだから、井月の素顔に接してはいない。自叙伝「私の履歴書」（『唐木順三全集』第十九巻 昭五七・二・二〇刊 筑摩書房に初収録）の冒頭部に、井月について祖父（六代）五郎右衛門、母かまよから聞いたところを記録している。

この祖父は體軀も頑丈で酒を飲み、魚を釣り、俳諧をやつた。當時、越後から流れてきて伊那に落着いた井月が私の村にもよく廻つてきた。母は子供の頃この井月を乞食井月とよび、ほろよひきげんの風狂人の尻について村さかひまで仲間とはやしながらつて廻つたといつてゐた。「どこやらに鶴の聲きく霞かな」といふのが隣村の路傍で死んだ井月の辞世である。この井月は相當に學識もあり、格調の高い句もよんでゐるが、酒屋から酒屋を廻つて生涯を終つた。私の村に山浦山圃と名乗る田舎宗匠がゐた。家業は造り酒屋である。ここが井月の私の村のたまりであつたやうである。巻紙を縦にして井月が例の達筆で句を書き、山圃が洒脱な畫を添へたのが、表装も

されずに、かなりたくさん残つてゐたが、いまはどうなつたらうか。
／＼祖父はこの井月、山圃の座の末席に加はつたらしい。俳號は木挺
と書いてキテイと読ませた。

唐木は井月について伝え聞く世代に属し、さらに約十年後に生まれた
のが島村利正である。なお、「火山峠」執筆時の島村の視野には、この
唐木の文章は「資料」に入らない。——右の二文は、下島も唐木も、父
祖たちの井月への尊敬感、親愛感の継承者であることを明らかにする。

下島は芥川家のホーム・ドクターである。が、その能書の才能を、最
初に認めたのは芥川らしい。筆墨を語り合つて、両方の交友関係は深ま
る。大正九年（推定）四月二日付の下島宛書簡「六八九」に、李太白・
劉禹錫・蘇東坡・盧仝らの詩を挙げて、うち一篇の揮毫を六曲屏風に求
めている。折りから文子夫人の産室に置いて、出産にそなえるために依
頼したものである。李白詩「問余何意棲碧山」の七言絶句を書いた屏風
の裡に、比呂志、多加志、也寸志の三子は誕生している。周知のように、
大正十一年春のころから書齋の扁額を変えて、「澄江堂」を掲げるが、
この下島の染筆は文壇人に喧伝される。これを契機に、神代種亮の依頼
に依つて『書物往来』の、室生犀星のために『驢馬』の雑誌表紙の題字
も書いている。ほかに室生、久保田萬太郎、佐藤惣之助らの著書にも、
下島の題簽を散見できる。

付言すると、『驢馬』誌上に下島は俳句を発表している。芥川の絶讃
したという二句を挙げる。代表作であろう。

薇ぞんまいの綿からぬけてあたたかき

「空谷山房句鈔」と題して、ほか九句を掲載。大正十五年五月一日
発行第二号。

土くれや雀の糞のほる寒き

「近詠」中に「空谷山房句鈔」と題して、ほか五句を掲載。昭和二
年三月十日臨時発行第拾号。

また、文人諸家との交渉は広く、画技にすぐれ、仕舞にたけ、文章
をよくする多芸多才の人でもある。私家版『井月の句集』、白帝書房本
『漂泊井月全集』の編著のほかに、次の随筆集・句集の刊行がある。各所
収の井月関係の文献、その初出なども示す。井月の盛行していた状況を
語る一斑ともなるだろう。

『空谷山房
隨筆集』人犬墨』昭一一・八・一五刊 竹村書店 題簽装幀 野

上豊一郎、跋 室生犀星

「俳人井月」文末付記に「（昭六、九、八、午後七、三〇 中央
放送局趣味講座口演）」とある。

「井月全集の巻頭に」白帝書房本『全集』に「巻頭に」と題して
載せたものを改題。

「井月の逸話」私家版に載せた「奇行逸話」二十五話を、白帝書
房本で三十七話に増補し、そのうち二十五話を採録。

句集『薇』昭一五・五刊 私家版・非売限定 序 野上豊一郎、「薇」
のあと 室生犀星 ただし未見

『隨筆・富岡鐵齋其の他』昭一五・一二・二八刊 興文社

「井月の追憶と春の句」昭一二・四・一発行『俳句研究』第四卷

第四号に掲載（改造社発行）。

「乞食井月と夏」 昭一五・八・一発行『旅』第十七卷第八号に掲載（日本旅行協会内日本旅行倶楽部発行）。

なお、句集『薇』の全容を添載する。

『芥川龍之介の回想』 昭二二・三・五刊 靖文社 装幀「河童の図

芥川龍之介」、題簽 室生犀星、用紙 八尾手漉紙

「俳人井月」 再録。付記は右に同じ。

井月に関して、下島が述べたのは『井月の句集』所収の「緒言」、「略傳（私の感想を加へて）」を合わせると、全七文のようである。断片的に言及した文章は加えない。——いづれも、属目した井月の風貌、日常生活を回想して論じ始める。さながら、親しい故人をしのび、ほめそやすに等しい口吻だ。句集刊行以来二十年にわたり、終始敬愛の念を捧げて、いともなつかしげに、井月を世に紹介し、その句を、書を賞翫しつづける。なかに珍しくも、その容貌を描いた、下島ならではものせぬ文章がある。もちろん、井月の写真も肖像画も残っていない。「略傳」より抄出する。

井月は瘦軀長身、禿頭無髻、トロリとした、切れ長な、斜視ではなからうかと思はせる変な眼を持った、そして大隈侯と石黒況翁の顔を搦き混ぜて、極めて無表情な間の抜けた、赤銅色の彫刻にでもしたやうな、印象の記憶が残つてゐる。

もとより、執筆時より四十年ほど前の記憶である。同旨を「俳人井月」にも語っているが、「彼は痩せてゐましたが、骨格の逞しい、身長は私

の父と比較して五尺六七寸ぐらひあつたらうか」とある。いわゆる乞食一般ではない。なかなか偉丈夫である。田夫、村夫子でもない。少年の目は、物乞いや身にまどつた襤褸を越えていよう。村内に見る常人ではなかった。井月像の感銘は鮮明で、深かつたのである。

出郷以来、医学の修業や日清、北清、日露の戦争に従軍し、帰還後は「田端」に楽天堂医院を開業して、繁忙のうちに井月にも遠のいていた。が、「良寛和尚や桃水」などを読むようになって、井月がよみがえつて来る。「ある友人」のもとで、偶然、「故郷の一俳人」に逢い、井月の句集の有無などを尋ねてみたりする。匿名のそれぞれを芥川龍之介宅、小穴一游亭に擬することも可能で、その時期も大正八年十一月か、十二月のことに仮定できる。この措定は前後の状況に整合するが、決定的には匿名で記述する理由がわからないから、一切の推測はつつしむ。「故郷の一俳人」は、句集を作るほどの価値はあるまい、と言つたようだ。下島は在郷の実弟富士（俳号は五山）に命じて、若干の井月句を送らせ、検討を加えてみる。

ひとたび井月のやうな境涯に生活する人間の心理に想到するとき、否、彼の姿を句の上に反映せしめるとき、尠くも私には、不思議に句の巧拙などを論ずるのが無意義のやうにさへ思はると同時に、その佳句と思ふものの中には、ひたすらこの一道に生命を托する漂泊詩人の尊い魂のささやきが感じられますので、さすがは井月である。と自分の予想の誤つてゐないことを喜んだのであります。（「巻

頭に」より）

という井月観はゆるがぬ。良寛に比すべき求道性を、その乞食道の徹底に見ているのである。下島は私費による句集の編纂、刊行を企図する。

なお、筆蹟に眼識を持つ下島の、井月書に対する評価は非常に高く、行きとどいている。単に、印象批評ではない。「緒言」より次のことを挙げておく。

兎に角漢字は和漢に互つて余程練磨を経たものであらうと思ふが、然し、和様の特質の著しいことや、筆触の心持や、結体までが、大雅堂や良寛和尚あたりに似通うてゐると云ふことは、幻住庵記（写真参照）を見ても略ぼ想察が出来ると思ふ。また短冊色紙などの仮名書きは、芭蕉に少し似た趣きがある故でもあらうが、何となく加茂流を通して光悦あたりを偲ばせるところがあつて、結局、秋萩帖あたりまでの風韻が漂うてゐるかのやうに思はれる。

資料の蒐集は主として富士の手によって、「大正九年三月」から翌十年「五月下旬」まで行なわれ、下島も一度は帰省して調査している。伊那峽谷の村々に、古くよみ捨て、書き捨てにした句、書の蒐集は至難の作業である。ほとんど、遺漏はまぬかれがたい。拙速の感があるのは、しかし、「（別に急ぐ訳もなかつたのでありますが、唯、熱と機会を失してはといふことと、父の存生中にといふ考へがありました）」という事情があつたのだ。

にわか死期に迫った父親に献呈しようという、孝心にもとづいていたのである。この孝心が、「田端」の離郷者たちを動かす。いま、芥川句の口吻の真意を知るのである。それぞれに抱く父祖愛が、血脈の地へ

の愛が『井月の句集』に集中する。島村が「火山峠」に物語ろうと試みるのは、おそらく、このあたりに在ったに違いない。

「大正十年十月二十五日発行」とある『井月の句集』が完成、納本されたのは「十一月四日」らしい。芥川の同日付下島宛書簡「九六六」には、次のように記されている。

拜啓 御使難有く存候 御本確に落手それそれへつかはず可く候
なほ昨日香取先生の御宅へ参上委細よろしく申上候間左様御承知下
され度候 右とりあへず当用のみ 頓首／井月の句集成る／月の夜
の落栗拾ひ尽しけり
と——。しかし、下島の父はこれを「見ずして逝きました」。

すでにして、石川淳の「井月」について言う必要はない。島村が「火山峠」構想の「資料」に採用しない、と考えられるからである。井月を虚無渺茫の間に遊ばせて、韜晦してしまうところに興趣を盛った名作は、生ま身の井月と交渉する群像を描く制作意図に、何よりも、もとることにならう。

〔昭和五十九年十一月九日 受理〕

（完）